

遊びと食事場面でのアタッチメント尺度作成の試み

—母親自身の幼少期における振り返りに焦点を当てて—

目白大学大学院心理学研究科 戸畑 祐子
目白大学人間学部 小野寺敦子

【要 約】

本研究の目的は、母親自身の幼少期における「遊び」と「食事場面」それぞれについての振り返り尺度と、子どもとの「遊び」と「食事場面」それぞれの場面についての振り返り尺度の計4つの尺度の作成を試みることである。研究では、70名の子育て中の母親の回答を得た。4つの尺度は、それぞれ24の質問項目に因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行なった結果、16の質問項目、3因子が抽出された。3因子の内容は、「安定した遊び（食事）」「拒否的な遊び（食事）」「不安・アンビバレントな遊び（食事）」であった。この結果より、「遊び」と「食事」には共通した3つのアタッチメントパターンが見られ、幼少期における振り返りのアタッチメントと現在の子どもの関わりにおける振り返りの間にも関連性が多く見られた。このことから、「遊び」と「食事」場面における母子のアタッチメントには世代間伝達もあることが示唆された。今後は、対象者の人数を増やして尺度内容について再度検討すること、個人属性やその他の要因との関連性を検証していくことが課題である。

キーワード：母親自身の幼少期の振り返り、アタッチメント、遊びと食事場面、世代間伝達

I. 問題と目的

近年、子どもの養育に関する問題の一つとして、親から子への虐待、児童虐待がある。虐待は、多くの要因が複雑に絡み合って発生するとされており、特に親自身の被養育体験が要因として挙げられ、親子関係における不安定な愛着や母親自身の親に対する愛着の違いなどが、虐待に関与している可能性が指摘されている（中谷, 2006）。さらに虐待は、子どもの精神発達の歪みや身体症状をもたらし、トラウマの後遺症としても把握されている（西澤, 1994）。

Bowlby (1973) が提唱した愛着理論では、子どもは養育者と相互交流（やりとり）を経験し、養育者の行動と応答可能性に対する期待や特別な愛情の絆が形成されていき、この絆を安全基地として人とのやりとりの仕方を学習していくとされている。そして、養育者とのやりとりを

子どもが繰り返し経験していくことにより、子どもの心の中に「インターナル・ワーキング・モデル（以下、IWMと略す）」という内的表象（イメージ）が育っていくものとしている。IWMとは、遭遇する出来事をどのように評価・解釈し、どのように未来を予測して、それに対して自分がどのように行動を計画していけばよいかを導く機能を持つものとされている（浦山・西村, 2009）。

IWMの評価法として、Ainsworthら（1978）が標準化した測定法「ストレンジ・シチュエーション法」がある。これは、secure（安定型）群、avoidant（回避型）群、ambivalent（アンビバレント型）群のように三つのパターンに分けることができる。secure群の子どもは、「自分は受容される存在である」「他者は自分が困った時には助けてくれる」といった内容のモデ

ルを形成するため、養育者のふるまいに確かな見通しを持つことができ、結果的にアタッチメント行動が全般的に安定しているとされている。また、avoidant群の子どもは、「自分は拒絶される存在である」「自分が近づこうとすれば他者は離れていこうとする」といったモデルを形成し、結果的に養育者との間に最低限の安全感を得ようとするため、あえてアタッチメントのサインを最小限に抑えるような回避的な振る舞いを見せてしまうとされている。一方、ambivalent群の子どもは、「自分はいつ見捨てられるかわからない」「他者はいつ自分の前からいなくなるかわからない」といった内容のモデルを形成しやすく、結果的に養育者の所在やその動きにいつも過剰なまでに用心深くなり、養育者の関心を絶えず自分のほうに引きつけておこうと最大限のアタッチメントのサインを示すような振る舞いを見せてしまうとされている。

このようなIWMは、乳幼児期において形成され、その後の対人関係を築く上での基盤となり、生涯を通じて変化なく持続していく傾向にあるものである。つまり、親から虐待や拒絶を受けた子どもは安定した愛着関係が形成できず、不安定なIWMをもつため、自らが親となった際に子どもに対して同様の態度を示す、というような世代間に伝達されていく可能性があるということがいえる。しかし、このような不安定なIWMの世代間伝達を断ち切り、解決に向かわせようとした研究者や実践家らの一人にFraiberg (1975) がいる。Fraibergは、親が乳幼児との問題に向き合う際に生じる負の感情を「赤ちゃん部屋のお化け (*Ghosts in the nursery*)」と表現し、親自身が幼少期から抱えている親との問題を振り返り、向き合うことを通して解決に向かわせるといった治療スタイルを行っていたのである。

「幼少期における愛着対象との関係性について回想すること」に焦点を当てているアタッチメントの研究には、AAI (Adult Attachment Interview) やASI (Attachment Style Interview) といった半構造化面接によるものがある。特にAAIは、欧米を中心に多くの国で広く用いられており、「早期の親子の関係性の質は、一生涯に渡るアタッチメント対象との関

係性の質に影響する」ことを前提として行なわれているものである。AAIは、幼少期のアタッチメント対象として、自身の親についての回想を中心として構造化された面接法であり、子どもの頃のアタッチメント関係が及ぼす現在への影響について焦点を当てたものである。つまり、AAIは、幼少期における親の記憶表象への接近の仕方に焦点を当てたものなのである (Fonagy, 2001)。しかし、測定するためには十分なトレーニングや資格に類似したもの等が必要なこと、判定基準が複雑であるために評定者によって誤差が生じる可能性もあること、測定法としての信頼性と妥当性に関しては未だに検討課題であること、などが問題として挙げられている。そのため、近年では回想による幼少期のアタッチメントを測定する尺度作成の試みが見られてきている (青柳・酒井, 1997; 酒井, 2001; 瀧川, 2003)。幼少期のアタッチメントを回想するための尺度を作成することにより、先述に挙げたような課題への対処も可能となることが期待されている。

これまでに幼少期の親とのアタッチメント関係が様々な影響を与えることは明らかにされてきているが、その関係性が形成される状況や場面について焦点を当てて検討されたものは少ない。しかし、親子の関わり合いにおいて重要な場面について注目し、その場面でのアタッチメントの形成について明らかにしていくことは、大変意義のあることであると思われる。

母子の関係性を促進させるための一要因とされる「母子相互作用」において母子の「遊び」と「食事」の場面というのは、重要な支援アプローチの場面とされている (寺本, 2008)。横井 (2006) は、乳幼児の心身の諸発達を支えていくためには、「遊び」を通して養育者や保育者は関わりをもっていくことが必要であると述べている。「遊び」は日常的に行なわれる親と子の関わりをもつ場面であり、それは子どもの発達に応じて変化をし、際限なくあるものなのである。子どもの発達には、親子の関わり合いを通してできる心理的結合性の場面が大切であり、その一場面として「食事場面」での関わり合いの重要性も述べられている (平井・岡本, 2003)。したがって、母親自身が経験した被養

育体験がその後の子どもとの関わりに影響を与えることや、母子の関係性のために重要なやりとりの場面とされている「遊び」と「食事」の場面に注目し、支援の矛先を向けていくことは重要なことであると思われる。

そこで、本研究では母子が日常的に関わり合いをもつとされる「遊び」と「食事」の場面に焦点を当て、母親自身の幼少期における振り返り尺度の開発を目的として行うこととする。そして、尺度を作成することにより、母親自身の親との体験や関係性について「遊び」と「食事」場面を通して振り返りをし、測定することが可能となることが考えられる。また、現在の子どもの「遊び」と「食事」場面でのアタッチメントを測定するため、尺度の開発を併せて行いたい。これは、母親の幼少期における「遊び」と「食事」場面でのアタッチメントと現在の子どもの「遊び」と「食事」場面でのアタッチメントとが関連しているのかどうかといった、アタッチメントの世代間伝達も見ることが可能となるからである。

II. 方法

(1) 実施時期と調査対象者

2010年6月から7月にかけて、東京近郊の子育て中の母親75名を対象に質問紙を配布した。分析の対象者となった親の総数は70人（回収率93.3%）であり、年齢は、2名（10代-25歳）、6名（26歳-29歳）、35名（30歳-35歳）、15名（36歳-39歳）、12名（40歳以上）であった。また、子どもの年齢は0歳~11歳であり、人数の内訳は56名（0歳-3歳）、46名（4歳-7歳）、10名（8歳-11歳）であった。また性別の人数内訳は男児66名、女児46名であった。子どもの数が1人である家庭は40（57%）、2人である家庭は19（27%）、3人以上である家庭は11（16%）であった。

(2) 調査の手続きおよび倫理的配慮

質問紙を直接手渡し、または郵送にて配布し、回答終了後は全て郵送により回収した。配布した質問紙には、調査への参加は自由意志であること、無記名回答とするため個人の匿名性は守られること等の倫理事項を記載し、紙面にて教示を行なった。

(3) 質問紙の内容

①母親の幼少期における遊び場面での振り返り

母親自身の幼少期における遊び場面における振り返りを測定するために、Ainsworth et al. (1978) や戸田 (1989)、青柳・酒井 (1997)、酒井 (2001) などの内的作業モデル尺度やアタッチメント尺度を参照し、母親の幼少期における遊び場面に関する質問項目を複数作成した。そして、安定した遊び場面、拒否的・回避的な遊び場面、アンビバレントな遊び場面の3つの領域において8項目ずつ（各尺度24項目ずつ）を選定した。母親自身の幼少期における遊び場面の振り返り尺度に関しては、各対象者が回答時に思い浮かべた「幼少期」に差異が生じる可能性が予測されたため、質問項目の前に「小さい頃とはいつ（何歳）頃のことであったか」といった質問を加え、記述してもらった。

②母親の幼少期における食事場面での振り返り

①の尺度と同様の手続きで母親の幼少期における遊び場面に関する質問項目を複数作成した。安定した食事場面、拒否的・回避的な食事場面、アンビバレントな食事場面の3つの領域において8項目ずつ（各尺度24項目ずつ）を選定した。母親自身の幼少期における食事場面の振り返り尺度に関しても、遊び場面と同様に質問項目の前に「小さい頃とはいつ（何歳）頃のことであったか」といった質問を加え、記述してもらった。

③子どもとの遊び場面の振り返り

現在の子どもの遊び場面に関する質問項目にも①と②の尺度と同様に、3つの領域において8項目ずつ（各尺度24項目ずつ）を選定した。

④子どもとの食事場面の振り返り

③と同様に、現在の子どもの食事場面に関する質問項目を、3つの領域において8項目ずつ（各尺度24項目ずつ）を選定した。

⑤母親の自己評価

子どもとの関わりを総合的に母親がどのように捉え、評価しているのかを測定するために、母親の自己評価尺度（14項目）を作成した。これは、母親が現在の子どもの関わりについて自己評価するものである。得点が高いほど自分自身と子どもとの関わりに対して肯定的に捉

え、親としての自分を高く評価していることを示している。

⑥内的作業モデル

尺度の妥当性を確認するため、戸田（1988）の内的作業モデル尺度（18項目）を使用した。

①から⑥までの全尺度の回答は、「1. とてもそう思う」から「6. 全くそう思わない」の6段階評定に統一し、設定した。本調査で使った全尺度の質問項目は、計128項目であった。前段階の調査として、全尺度に関する質問項目について乳幼児を育てる親5名に実施した。結果、項目内容にやや不明瞭なものがあると指摘を受けた項目があったため、本調査では、いくつかの項目に修正を行なったものを使用した。

Ⅲ. 結果

まず、母親自身の幼少期における遊びと食事場面の振り返りに関するそれぞれの質問項目と、子どもとの遊びと食事場面の振り返りに関するそれぞれの質問項目の選択肢「とてもそう思う」—「全くそう思わない」に対して1点—6点を与え、各24項目（24×4：96項目）の回答の平均値と標準偏差を算出した。平均値±1SDを基準に項目分析を行なったところ、天井効果やフロア効果は見られなかった。そこで、全項目を用いて、母親自身の幼少期における遊び・食事場面の振り返り、子どもとの遊び・食事場面の振り返りに分け、それぞれ主因子法による因子分析を行なった。また、母親の自己評

Table 1
母親自身の幼少期における遊び場面の振り返り尺度 因子分析結果（主因子法・プロマックス回転：N=70）

項目内容	I	II	III
I 安定した遊び ($\alpha = .86$)			
5 私は母親と遊ぶのが好きだった	1.07	.30	-.19
8 遊んでいるときに、母親は私のことを見守ってくれていた	.70	-.17	.09
1 私は母親と遊ぶことが楽しかった	.70	-.22	.10
3 遊びの中で母親によく褒められた	.69	.07	-.04
7 遊びの中で母親に頼ったり甘えたりすることができた	.59	-.05	.30
4 母親のそばで遊ぶことは安心であった	.48	-.05	-.11
II 拒否的な遊び ($\alpha = .93$)			
17 母親と遊んでいるときにびくびくしていた	.23	.97	-.01
20 母親の顔をうかがいながら遊んでいた	.10	.92	.02
15 私は母親に、一人で遊ぶことを求められているように感じていた	.17	.83	-.05
14 母親は私と遊ぶことを好きではないと感じたことがあった	-.21	.79	-.03
24 一緒に遊んでいるときに、母親は本当は私と遊びたくないのではないかと心配だった	.10	.78	.19
13 一緒にいるときに、母親は遊びに応じてくれないことがあった	-.30	.58	-.01
III 不安・アンビバレントな遊び ($\alpha = .75$)			
22 友達と遊んでいても、母親がいないと不安だった	-.06	.05	.96
21 母親がそばにいないと遊ぶことができなかった	.02	-.00	.79
23 一人で遊んでいると母親を思い出して泣くことがあった	-.09	.10	.73
6 私は遊んでいるときに母親がいないでも平気だった	-.16	.02	-.42
因子間相関	I	II	III
I	—	-.55	.11
II		—	.05
III			—

価に関する質問項目においても項目分析を行い、同様に問題が見られなかったため、その後因子分析を行なった。

(1) 尺度の構成

①「母親自身の幼少期における遊び場面の振り返り」に関する項目

「母親自身の幼少期における遊び場面の振り返り」の24項目に対して主因子法による因子分析を行なった結果、固有値の変化より3因子構造が妥当であると考えられた。そのため、再度、3因子を仮定して、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。回転前の3因子で24項目の全分散を説明する割合は46.60%であった。次に、項目を精選するため、3つの因子について負荷量が.40未満の項目8つを削除し、残った項目について再度同様の因子分析を行った。結果、Table 1に示すような3因子、16項目の因子パターンが得られた。

第1因子は、「遊んでいるときに、母親は私のことを見守ってくれていた」など、遊び場面での母親との「良好で安定した関係」に関する振り返り項目が高い負荷量を示していた。また、Ainsworth et al. (1978) や酒井 (2001) らが示す「secureな関係」にも当てはまることから、「安定した遊び (以下、遊び安定)」因子と命名した。第2因子は、「私は母親に、一人で遊ぶことを求められているように感じていた」など、遊び場面での母親の自分への無関心さや「拒否的で距離のある関係」に関する振り返り項目が高い負荷量を示していた。また、Ainsworth et al. (1978) や酒井 (2001) らが示す「拒否的でavoidantな関係」にも当てはまることから、「拒否的な遊び (以下、遊び拒否)」因子と命名した。第3因子は、「友達と遊んでも、母親がいないと不安だった」など、遊び場面での母親への依存的な傾向である「不安・アンビバレントな関係」に関する振り返り項目が高い負荷量を示していた。また、Ainsworth et al. (1978) や酒井 (2001) らが示す「ambivalentな関係」にも当てはまることから、「不安・アンビバレントな遊び (以下、遊び不安・ambi)」因子と命名した。

②「母親自身の幼少期における食事場面の振り返り」に関する項目

同様に、「母親自身の幼少期における食事場面の振り返り」の24項目に対して主因子法による因子分析を行なった。固有値の変化より、3因子構造が妥当であると考えられた。そのため、再度、3因子を仮定して、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。回転前の3因子で24項目の全分散を説明する割合は45.62%であった。次に、項目を精選するため、いずれかの因子について負荷量が.40未満の項目8つを削除し、残った項目について再び同一方法で因子分析を行なった。結果、Table 2に示すような3因子、16項目の因子パターンが得られた。

第1因子は、「母親と一緒にの食事はとても安心感があった」など、食事場面での母親との「良好で安定した関係」に関する振り返り項目が高い負荷量を示していた。また、Ainsworth et al. (1978) や酒井 (2001) らが示す「secureな関係」にも当てはまることから、「安定した食事 (以下、食事安定)」因子と命名した。第2因子は、「母親は私と食事をするのが好きではないと感じたことがあった」など、食事場面での母親の自分への無関心さや「拒否的で距離のある関係」に関する振り返り項目が高い負荷量を示していた。また、Ainsworth et al. (1978) や酒井 (2001) らが示す「拒否的でavoidantな関係」にも当てはまることから、「拒否的な食事 (以下、食事拒否)」因子と命名した。第3因子は、「他の人と一緒に食事をしていても、母親がいないと不安だった」など、食事場面での母親への依存的な傾向である「不安・アンビバレントな関係」に関する振り返り項目が高い負荷量を示していた。また、Ainsworth et al. (1978) や酒井 (2001) らが示す「ambivalentな関係」にも当てはまることから、「不安・アンビバレントな食事 (以下、食事不安・ambi)」因子と命名した。

③「子どもとの遊び場面の振り返り」に関する項目

次に、「子どもとの遊び場面の振り返り」の24項目に対して主因子法による因子分析を行なった。固有値の変化より、3因子構造が妥当であると考えられた。そのため、再度、3因子を仮定して、主因子法・プロマックス回転によ

る因子分析を行なった。回転前の3因子で24項目の全分散を説明する割合は、41.69%であった。次に、項目を精選するため、いずれかの因子について負荷量が.40未満の項目8つを削除し、残った項目について同一方法で因子分析を行なった。結果、Table 3 に示すような3因子、16項目の因子パターンが得られた。

第1因子では、「子どもは遊びの中で私に頼ったり甘えることができている」など、自分との遊びに対する子どもの安心感や「良好で安定した関係」に関する振り返り項目に高い負荷量を示していた。また、Ainsworth et al. (1978) や酒井 (2001) らが示す「secureな関係」にも当てはまることから、「安定した遊び (以下、遊び安定)」因子と命名した。第2因子

では、「私と遊ぶことを、子どもはあまり好きではないように感じることもある」など、自分との遊びに対する子どもの無関心さや「拒否的で距離のある関係」に関する振り返り項目が高い負荷量を示していた。また、Ainsworth et al. (1978) や酒井 (2001) らが示す「拒否的で avoidantな関係」にも当てはまることから、「拒否的な遊び (以下、遊び拒否)」因子と命名した。第3因子では、「友達 (または他の大人) と遊んでいても、私がそばにいないと不安になってしまう」など、自分との遊びに対する子どもの依存的な傾向である「不安・アンビバレントな関係」に関する振り返り項目に高い負荷量を示していた。また、Ainsworth et al. (1978) や酒井 (2001) らが示す「ambivalentな関係」に

Table 2
母親自身の幼少期における食事場面の振り返り度 因子分析結果 (主因子法・プロマックス回転: N=70)

項目内容	I	II	III
I 安定した食事 ($\alpha = .92$)			
3 食事のときに、母親によく褒められた	.95	.09	-.01
4 母親と一緒に食事はとても安心感があつた	.86	.10	-.17
1 私は母親と食事をすることが楽しかつた	.85	.08	.16
5 私は母親と食事をすることが好きだつた	.80	-.19	.09
8 食事のときに、母親は私のことを見守つてくれている	.74	-.11	.03
7 食事のときに困ると、母親に頼ることができた	.62	-.14	-.10
II 拒否的な食事 ($\alpha = .94$)			
17 母親と食事をしているときにびくびくしていた	.14	1.02	-.08
14 母親は私と食事をすることが好きではないと感じたことがあつた	.01	.98	-.02
15 私は母親に、一人で食事をすることを求められているように感じていた	-.08	.84	-.06
24 一緒に食事をしているとき、母親は本当に私と食事をしたくないのではないかと心配だつた	-.08	.76	.15
20 母親の顔をうかがいながら食事をしていた	-.07	.72	.15
13 食事のときに、母親は私の呼びかけに応じてくれないことがあつた	.00	.70	.01
III 不安・アンビバレントな食事 ($\alpha = .69$)			
22 他の人と一緒に食事をしているとき、母親がいないと不安だつた	.04	-.05	.94
23 一人で食事をしていると、母親を思い出して泣くことがあつた	-.07	.11	.69
21 母親がそばにいないと食事をすることができなかつた	.03	.15	.62
6 食事のとき母親がいなくても平気なほうであつた	-.03	.37	-.44
因子間相関	I	II	III
I	—	-.58	.23
II		—	-.08
III			—

も当てはまることから、「不安・アンビバレントな遊び（以下、遊び不安・ambi）」因子と命名した。

④「子どもとの食事場面の振り返り」に関する項目

そして、さらに「子どもとの食事場面の振り返り」の24項目に関して、主因子法による因子分析を行なった。固有値の変化より、3因子構造が妥当であると考えられた。そのため、再度、3因子を仮定して、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行なった。回転前の3因子で24項目の全分散を説明する割合は、48.47%であった。次に、項目を精選するため、いずれ

かの因子について負荷量が.40未満の項目8つを削除し、残った項目について再び同一の方法で因子分析を行なった。結果、Table 4に示すような3因子、16項目の因子パターンが得られた。

第1因子では、「私と一緒に食事をする子どもは安心してている」など、自分との食事に対する子どもの安心感や「良好で安定した関係」に関する振り返り項目に高い負荷量を示していた。また、Ainsworth et al. (1978) や酒井 (2001) らが示す「secureな関係」にも当てはまることから、「安定した食事（以下、食事安定）」因子と命名した。第2因子では、「子ども

Table 3
子どもとの遊び場面の振り返り尺度 因子分析結果（主因子法・プロマックス回転：N=70）

項目内容	I	II	III
I 安定した遊び ($\alpha = .80$)			
7 子どもは遊びの中で私に頼ったり甘えることができる	.89	.09	.08
1 子どもは私と遊んでいる時間をとても楽しんでいる	.68	.11	.04
8 遊んでいるときに、子どもは私に見守られているように感じていると思う	.59	-.17	.13
5 子どもは私と遊ぶことが好きである	.58	-.04	-.10
3 遊びの中で子どもを褒めるとうれしそうである	.49	-.34	-.22
4 遊んでいるときにそばにいと、子どもは安心してている	.48	-.34	-.06
II 拒否的な遊び ($\alpha = .84$)			
14 私と遊ぶことを、子どもはあまり好きではないように感じることもある	.01	.85	-.06
17 子どもは、私と遊んでいるときにびくびくしているように思う	.02	.81	.03
24 一緒に遊んでいるときに、子どもは本当は私と遊びたくはないのではないかと心配だった	.03	.78	.14
13 子どもと一緒に遊んでいるときに、急に怒ったり、無反応であったりすることがある	.12	.72	.01
15 子どもが、一人で遊びたがっているように感じることもある	-.13	.61	-.14
20 私の顔をうかがいながら一緒に遊んでいるようなことがある	-.04	.57	.01
III 不安・アンビバレントな遊び ($\alpha = .80$)			
6 子どもは遊んでいるときに、私がそばにいないでも気にしないでいられる	.33	.14	-.96
22 友達(または他の大人)と遊んでいても、私がそばにいないと不安になってしまう	.11	-.00	.68
23 一人遊びのときに、急に私を求めて泣いていることがある	.17	.18	.67
21 私がそばにいないと子どもは遊ぶことができない	.15	.09	.57
因子間相関	I	II	III
I	—	-.33	.30
II		—	-.04
III			—

は、私と食事をしているときにびくびくしているように思う」など、自分との食事に対する無関心さや「拒否的で距離のある関係」に関する振り返り項目に高い負荷量を示していた。また、Ainsworth et al. (1978) や酒井 (2001) らが示す「拒否的でavoidantな関係」にも当てはまることから、「拒否的な食事 (以下、食事拒否)」因子と命名した。第3因子では、「私がそばにいないと子どもは食事をすることができない」など、自分との食事に対する子どもの依存的な傾向である「不安・アンビバレントな関係」に関する振り返り項目に高い負荷量を示していた。また、Ainsworth et al. (1978) や酒井

(2001) らが示す「ambivalentな関係」にも当てはまることから、「不安・アンビバレントな食事 (以下、食事不安・ambi)」因子と命名した。

⑤ 「母親の自己評価」に関する項目

さらに「母親の自己評価」の全14項目に関して主因子法による因子分析を行なった。固有値の変化より、2因子構造が妥当であると考えられた。そのため、再度、2因子を仮定して主因子法・プロマックス回転による因子分析を行なった。回転前の2因子で14項目の全分散を説明する割合は、57.71%であった。また、全14項目に負荷量が.40未満の項目は見られなかった。したがって、Table 5に示すような、2因子、14

Table 4
子どもとの食事場面の振り返り尺度 因子分析結果 (主因子法・プロマックス回転：N=70)

項目内容	I	II	III
I 安定した食事 ($\alpha=.90$)			
4 私と一緒に食事をすると子どもは安心している	.95	.10	.00
5 子どもは私と食事をすることが好きである	.85	-.13	-.06
3 食事中に子どもを褒めるとうれしそうである	.80	.08	-.18
8 食事のときに、子どもは私に見守られているように感じていると思う	.78	-.03	-.03
7 子どもは食事の中で困ると私に頼ったり甘えることができています	.65	.01	.17
1 子どもは私との食事をとても楽しんでいる	.65	-.08	.20
II 拒否的な食事 ($\alpha=.87$)			
24 "一緒に食事をしているときに、子どもは本当は私と食事をしたくはないのではないかと心配だった"	.11	.95	-.00
17 子どもは、私と食事をしているときにびくびくしているように思う	.00	.85	-.02
15 子どもが、私と食事をすることを嫌がっているように感じることもある	-.05	.82	.00
20 私の顔をうかがいながら食事をしているようなことがある	-.06	.73	.03
14 私と食事をすることを、子どもはあまり好きではないように感じることもある	-.16	.71	.49
13 子どもは食事中、急に怒ったり無反応であったりすることがある	.09	.44	-.10
III 不安・アンビバレントな食事 ($\alpha=.85$)			
21 私がそばにいないと子どもは食事をすることができない	.06	.13	.94
22 友達(または他の大人)と一緒に食事をしても、私がそばにいないと不安になってしまう	-.05	.00	.85
23 離れて食事をしているときに、急に私を求めて泣いていることがある	.04	.04	.71
6 食事のとき私がそばにいても子どもは気にしないでいられる	.03	.30	-.62
因子間相関	I	II	III
I	—	-.54	.13
II		—	.12
III			—

項目の因子パターンが得られた。

第1因子では、「私は子どもと色々なことを楽しむことができる」など、子どもとの関わりに対する自分自身の評価を表す項目に高い負荷量を示していた。そこで、「子どもとの肯定的な関わり」因子と命名した。第2因子では、「私は親として、子どもを育てる力があると思う」など、子どもに対して親としての育児力や存在価値を表す項目に高い負荷量を示していた。そこで、「親としての能力」因子と命名した。

(2) 信頼性の検討

各因子に高い負荷量を示した項目の粗点を合計し、その項目数で割った値を各尺度の得点とした。また、内的整合性を検討するために α 係数を算出した (Table 6 参照)。一部の尺度で α 係数にやや低めのものが見られたが、大部分の尺度では.80前後であり十分信頼できる値が得られたといえる。

(3) 尺度間相関と基準関連妥当性の検討

次に、「母親自身の幼少期における遊び場面

の振り返り尺度」、「母親自身の幼少期における食事場面の振り返り尺度」、「子どもとの遊び場面の振り返り尺度」、「子どもとの食事場面の振り返り尺度」の4つの尺度に加え、「母親の自己評価尺度」も含めた5つの尺度間の相関係数を Table 7 に示す。下位尺度間の相関には、有意な正、または負の相関が複数見られた。(以下、相関の程度の表現に関しては、小塩 (2004) の判断基準を参照する)

「母親自身の幼少期における遊び場面の振り返り尺度」と「母親自身の幼少期における食事場面の振り返り尺度」の尺度間、「子どもとの遊び場面の振り返り尺度」と「子どもとの食事場面の振り返り尺度」の尺度間に比較的強い、または強い正・負の相関であった。さらに、「母親自身の幼少期における遊び・食事場面の振り返り尺度」の2つの尺度と「子どもとの遊び・食事場面の振り返り尺度」の2つの尺度間には弱い正・負の相関があった。そして、「母親の自己評価尺度」では、「母親自身の幼少期における遊

Table 5 母親の自己評価尺度 因子分析結果 (主因子法・プロマックス回転: N=70)

項目内容	I	II
I 子どもとの肯定的な関わり ($\alpha = .85$)		
13 私は子どもと色々なことを楽しむことができる	-0.97	.16
12 私は子どもといるときに自然でいられる	.93	-0.04
14 私は子どもからよく甘えられる(頼られる)存在である	.84	-0.20
8 私は子どもと接するときに構えて(緊張して)しまう	-0.82	.04
9 私は子どもを安心してみていることができる	.77	.16
2 私は子どもに好かれていないと思う	-0.61	-0.09
10 私は子どもへ積極的に関わることができる	.59	.37
4 私は子どもと付き合いことが下手だと思う	-0.55	-0.25
11 私は子どもに感情を表現することがうまくできない	-0.52	-0.35
II 親としての能力 ($\alpha = .93$)		
5 私は親として、子どもを育てる力があると思う	-.14	.97
1 私は子どもにとってかけがえのない存在であると思う	-.17	.86
3 私は子どもが不安なとき、安心させてあげられると思う	.13	.64
7 私は親として子どもに対する権限をもっていると思う	-.02	.62
6 私は子どもの見本となることができない	-.30	-.57
因子間相関	I	II
I	—	.69
II		—

び・食事場面の振り返り尺度」の2つの尺度と「子どもとの遊び・食事場面の振り返り尺度」の2つの尺度との間には弱い、または比較的強い正・負の相関が見られた。

また、「母親自身の幼少期における遊び場面の振り返り尺度」、「母親自身の幼少期における食事場面の振り返り尺度」、「子どもとの遊び場面の振り返り尺度」、「子どもとの食事場面の振り返り尺度」の4つの尺度の妥当性を検討するために、戸田（1988）の内的作業モデル尺度（以下、「IWM」）との相関係数を算出したところ、戸田（1988）の「IWM」の下位尺度の「安

定型」はそれぞれの尺度の第1因子である「安定した遊び」「安定した食事」との間の相関係数が（.53～.97）高かった。戸田（1988）の「IWM」の「回避型」は、それぞれの尺度の第2因子である「拒否的な遊び」「拒否的な食事」との間の相関係数が（.44～.87）高く、「アンビバレント型」とは、それぞれの尺度の第3因子である「不安・アンビバレントな遊び」「不安・アンビバレントな食事」との間の相関係数が（.52～.86）高かった。

Table 6

母親自身の幼少期における遊び場面の振り返り尺度の平均と標準偏差（N=70）

因子名	項目数	α 係数	平均値	SD
安定した遊び	6	.86	29.00	4.54
拒否的な遊び	6	.93	12.09	5.71
不安・アンビバレントな遊び	4	.75	6.10	2.59

母親自身の幼少期における食事場面の振り返り尺度の平均と標準偏差（N=70）

因子名	項目数	α 係数	平均値	SD
安定した食事	6	.92	26.66	5.77
拒否的な食事	6	.94	9.63	4.61
不安・アンビバレントな食事	4	.69	7.33	2.74

子どもとの遊び場面の振り返り尺度の平均と標準偏差（N=70）

因子名	項目数	α 係数	平均値	SD
安定した遊び	6	.80	31.81	2.83
拒否的な遊び	6	.84	10.40	3.59
不安・アンビバレントな遊び	4	.80	8.81	3.78

子どもとの食事場面の振り返り尺度の平均と標準偏差（N=70）

因子名	項目数	α 係数	平均値	SD
安定した食事	6	.90	29.80	3.81
拒否的な食事	6	.87	10.01	4.60
不安・アンビバレントな食事	4	.85	9.19	4.07

母親の自己評価尺度の平均と標準偏差（N=70）

因子名	項目数	α 係数	平均値	SD
子どもとの肯定的な関わり	5	.85	21.36	4.22
親としての能力	9	.93	36.68	7.56

Table 7 「母親自身の幼少期における遊び・食事場面の振り返り」
「子どもとの遊び・食事場面の振り返り」「母親の自己評価」の下位尺度間相関係数 (N=70)

母親自身の幼少期における振り返り						子どもとの場面の振り返り						自己評価		
遊び 安定	遊び 拒否	遊び 不安 ambi	食事 安定	食事 拒否	食事 不安 ambi	遊び 安定	遊び 拒否	遊び 不安 ambi	食事 安定	食事 拒否	食事 不安 ambi	子との 関わり	親力	
母親自身の幼少期における振り返り														
遊び安定	—	-.57**	.13	.72**	-.45**	.10	.25*	-.32**	.01	.24*	-.29*	-.05	.47**	.57**
遊び拒否		—	.16	-.33**	.61**	.23	.01	.21	.23	-.03	-.02	.08	-.31**	-.18
遊び不安 ambi			—	-.12	.26*	.74**	-.32**	.11	.29*	-.34**	.15	.28*	-.18	.10
食事安定				—	-.57**	.00	.35**	-.29*	.02	.37**	-.39**	-.11	.35**	.47**
食事拒否					—	.11	-.03	.38**	.29*	-.12	.16	.15	-.27*	-.19
食事不安 ambi						—	-.16	-.03	.35**	-.16	.14	.38**	-.10	.11
子どもとの場面の振り返り														
遊び安定							—	-.38**	-.06	.82**	-.57**	.12	.37**	.36**
遊び拒否								—	.26*	-.41**	.61**	.06	-.66**	-.51**
遊び不安 ambi									—	-.07	.05	.68**	-.15	-.06
食事安定										—	-.50**	.16	.50**	.49**
食事拒否											—	.06	-.39**	-.37**
食事不安 ambi												—	.00	-.06
母親の自己評価														
子との 関わり													—	.64**
親力														—

*p<.05, **p<.01.

(4) 各対象者が幼少期についての回答時に思い浮かべた「小さい頃」について

対象者（母親自身）が「幼少期における遊びと食事場面の振り返り尺度」について回答する際に、いつ（何歳）頃のことを振り返りながら回答をするのかどうかと質問内容に項目を加えた。その結果、どの母親にも幼稚園～小学校低学年（4歳～8歳まで）の間と回答することが多く見られた。したがって、「小さい頃」の親との遊びと食事のやりとりに関しての記憶は、4歳～8歳の間について想起したものが多いことから「小さい頃」の示していた年齢（期間）がだいたい共通した頃であったといえよう。その頃の経験が印象として残っているということが考えられる。

IV. 考察

(1) 「母親自身の幼少期における遊び・食事場面の振り返り尺度」について

「母親自身の幼少期における振り返り」に関する質問項目を、遊び、食事という場面別に作成し、因子分析を行なったところ、両場面共通した内容の項目「安定」「拒否」「不安・アンビバレント」という3つの因子構造が確認された。採用された3因子に該当する項目は、それぞれの場面での母親との経験を「安定」「拒否」「不安・アンビバレント」の3つのアタッチメントパターンを通し、振り返りながら捉えているものであることがわかる。しかし、遊び・食事場面での母親との経験が幼少期に実際はどの程度感じられていたものなのか、継続的なものであり頻繁なことであったのか、それとも稀なものであったのか、年齢によって変化していたのかといった疑問が生じるが、本調査では明らかにすることができていない。また、多くの母親は「幼稚園～小学校低学年（4～8歳）」の頃に振り返りの時期を設定し、答えていた。そのため「幼少期（小さい頃）」の範囲に大きな差異は生じていないものと思われるが、「幼少期（小さい頃）」の範囲を指定する必要性も今後の検討課題である。よって、今後の調査では、「幼少期」の年齢幅の検討や、遊び・食事場面での親との関わりや関係性の年齢による変化を見ていくことが課題として考えられる。

(2) 「子どもとの遊び・食事場面の振り返り尺度」について

次に、「子どもとの関わる場面への振り返り」に関する質問項目を、遊び、食事という場面別に作成し、因子分析を行なったところ、両場面共通した内容の項目「安定」「拒否」「不安・アンビバレント」という3因子構造が確認された。採用された3因子に該当する項目は、それぞれの場面での子どもとの関わりを「安定」「拒否」「不安・アンビバレント」の3つのアタッチメントパターンを通し、振り返りながら捉えているものであることがわかる。しかし、今回の調査では、対象者の子どもに年齢制限を幅広く設定していたため、母親らが答えた子どもの遊びと食事場面の状態に統一性があったとは言い難い。また、育てている子どもの人数にも違いがあったため、どの子どもにターゲットをあてた回答であったかどうかもわからない。そのため、今後は、回答対象の子どもを明確にすることや子どもの出生順位による結果の違い等も検討していく必要があると考えている。

(3) 各尺度の相関について

母親自身の幼少期における遊びと食事場面の振り返りの尺度間の相関から、「安定した遊び」と「安定した食事」の間、「拒否的な遊び」と「拒否的な食事」、「不安・アンビバレントな遊び」と「不安・アンビバレントな食事」の間の相関から、それぞれは相互に関係していることがわかった。また、子どもとの遊びと食事場面の振り返りの尺度間の相関においても、同様の結果が見られている。よって、幼少期においても、現在の子どもの関わりにおいても、「遊び」と「食事」の場面では主観的な自己評価では、同一のアタッチメントパターンの傾向が明らかになった。

そして、「母親自身の幼少期における遊びと食事場面の振り返り尺度」と「子どもとの遊びと食事場面の振り返り尺度」の間の相関から、母親自身の幼少期の「遊び」と「食事」場面での親との経験が、現在の子どもの「遊び」と「食事」場面での関係にも影響を与えている可能性が示唆された。これは、Bowlby (1973) が「子どもは知らず知らず親を同一視し、その結

果、親になったときには、自分が子ども時代に経験したものと同一型の行動を子どもに対して示す傾向があるから、この相互作用の型が多かれ少なかれ、世代から世代へと忠実に伝達される」と述べているような、自分の幼少期の体験がその後の世代へと受け継がれ、再びその経験が現れるというように伝達されていくということを示唆している（戸畑，2010）。このことを「世代間伝達（intergenerational transmission）」と言い、この伝達の鎖をいかにして断つかが現代の精神保健の課題の一つであると渡辺（2000）は述べている。これまでも、また今回の結果においても母親自身の幼少期と現在の子どものとの関わりは、相互に関係していることが明らかにされたが、下位尺度によっては、低い相関、あるいは相関が見られないものもあり、今後は他の要因との関連も含めて詳細に見ていく必要があるだろう。

V. 本研究の今後の課題

本研究では、「母親自身の幼少期における遊び・食事場面の振り返り」の2つの尺度と「子どもとの遊び・食事場面の振り返り」の2つの尺度を主に作成を試みた。結果、各尺度に3因子が抽出され、信頼性および構成概念妥当性の実証を行なうことができたと思われる。しかし、対象者の人数が十分とはいえないため、今後はさらにサンプル数を増やし、回答の対象児を特定しておくことや対象児の年齢を設定すること、内的妥当性の検討なども含めて検証していく必要性を考えている。また、本研究では尺度作成が目的であったため、母親自身や子どもらの属性による比較、尺度の数値結果の高低群の結果についての比較、他の尺度との関連性などの検討は行わなかった。そのため、このことについても今後の大きな課題であると思われる。さらに、本研究において作成した「母親の自己評価尺度」との関連についても結果として深く触れ、考察することができなかつたため、これについても今後、より詳細に検討を重ねていく必要があるだろう。

本研究において尺度を作成した意義としては、母親自身の幼少期の振り返りと現在の子どものとの関わりが「安定」「拒否」「不安・アンビ

バレント」といった従来のアタッチメントパターンと同様に分類されたため、愛着関係の先行研究との比較が容易となったことや、「遊び」と「食事」という場面を設定したことにより、より具体的な場面での「世代間伝達」の実態を把握していくことが可能となったことが挙げられ、子育て支援の一助となることが期待される。したがって、作成した尺度が活躍の場を広げていくためにも調査対象者を拡大し、母親自身だけではなく子ども側の要因等も含めて親と子の両者を対象とした継続的な研究を行なっていきたいと考えている。そのためにも、本研究の結果で明らかになったことや課題を考慮した研究が行なわれ、量的な研究に併せて質的な臨床研究も実践されていくことが望まれよう。

【引用文献】

- Ainsworth, M.D.S., Blehar, M.C., Waters, E., & Wall, S. (1978). *Patterns of attachment: A psychological study of the strange situation*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, Inc.
- 青柳 肇・酒井 厚. (1997). アダルト・アタッチメントと回想による幼少期のアタッチメントとの関係. 早稲田大学人間科学研究, 10 (1), 7-16.
- Bowlby, J. (1973). *Attachment and loss, Vol.2 Separation: Anxiety and Anger*. New York: Basic Books. (J. ボウルビィ: 黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子(訳) (1977/1991). 母子関係の理論Ⅱ 分離不安 岩崎学術出版社.)
- Fonagy, P. (2001). *Attachment theory and psychoanalysis*. London: Other Press. (フォナギー, P. 遠藤俊彦・北山修(監訳) (2008). 愛着理論と精神分析. 誠信書房.)
- Fraiberg, S., Adelson, E., & Shapiro, V. (1975) *Ghosts in the nursery: A psychoanalytic approach to the problem of impaired infant-mother relationships*. *Journal of the American Academy in Child Psychiatry*, 14, 397-421.
- 平井滋野・岡本祐子. (2003). 食事場面の会話と親子の心理的結合性の関連. 青年心理学研究, 15, 33-49.
- 小塩真司. (2004). SPSSとAmosによる心理・調査データ解析-因子分析・共分散構造分析まで. 東京図書.

- 中谷奈美子・中谷素之。(2006). 母親の被害的認知が虐待的行為に及ぼす影響. 発達心理学研究, 17 (2), 145-158.
- 西澤 哲。(1994). 子どもの虐待:子どもと家族への治療アプローチ. 誠信書房.
- 酒井 厚。(2001). 青年期の愛着関係と就学前の母子関係-内的作業モデル尺度作成の試み. 性格心理学研究, 9 (2), 59-70.
- 瀧川由美子。(2003). 幼少期のアタッチメント形成が青年期に与える影響について-幼少期のアタッチメントの連続性から考える. 奈良文化女子短期大学, 34. 41-47.
- 詫摩武俊・戸田弘二。(1988). 愛着理論からみた青年の対人態度:成人版愛着スタイル尺度作成の試み. 東京都立大学人文学報, 196, 1-16.
- 寺本妙子, 他。(2008). 4歳時点の子どもの発達と早期母子相互作用および母親の精神的健康との関連:日本人母子における予備的研究. 小児保健研究, 67 (5), 706-713.
- 戸畑祐子・小野寺敦子。(2010). Selma Fraibergの理論・治療アプローチ. 目白大学心理学研究, 6. 67-79.
- 戸田弘二。(1988). 青年期後期における基本的対人態度と愛着スタイル:作業仮説 (working models) からの検討. 日本心理学会第52回大会発表論文集, 27.
- 浦山晶美・西村真実子。(2009). 母親の内的ワーキングモデルと虐待的な養育態度との関連性. 日本公衛誌, (4), 223-231.
- 渡辺久子。(2000). 母子臨床と世代間伝達. 金剛出版.
- 横井絃子。(2006). 保育における「遊び」の捉えについての一考察 —現象学的視座から「遊び」理解の内実を探る—. 保育学研究, 44 (2), 93-103.

謝辞

御指導いただきました小野寺敦子教授、ご協力いただきましたお母様方、調査の収集に協力してくださった皆様に深く感謝申し上げます。

Development of attachment on play and meal scenes scales : Focus on look back in mother's early childhood

Yuko Tobata

Mejiro University, Graduate School of Psychology

Atsuko Onodera

Mejiro University, Faculty of Human Sciences

Mejiro Journal of Psychology, 2011 vol.7

【Abstract】

The purpose of this study was to develop Four scales. 4scales were “Look back on play and meal scenes scale in mother's early childhood” and “Look back scale in play and meal scenes with child”. The subjects were 70 mothers. They were administered a 6-point scale ratings of 4 scales, which was composed of 24 items. Based on the factor results, it was concluded that a three-factor structure is appropriate for 3 types of “secure play and meal”, “reject (avoid) play and meal” and “anxiety/ambivalent play and meal”. And, scales were composed of 16 items. Results of this analysis showed that play and meal has common three attachment, related to “Look back on play and meal scenes scale in mother's early childhood” and “Look back scale in play and meal scenes with child”. These results indicate that mother-child's attachment has intergenerational transmission. In the future, we have to will increase number of subjects. And also, individual attribute and other factors will have to examine.

keywords : look back in mother's early childhood, attachment,
play and meal scenes, intergenerational transmission